様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５２８５２４２

研究課題名（和文）地理、歴史、公民を関連させた社会科としてのESD実践の構築と発信に関する研究

研究課題名（英文）Education for Sustainable Development in the Curriculum: Geography, History, Civics, and Social Studies

研究代表者
井田　仁康（IDA, Yoshiyasu）

筑波大学・人間系・教授

研究者番号：２０２０３０８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　14,000,000円

研究成果の概要（和文）：世界的に関心がもたれているESD(Education for Sustainable Development)に着目し地理、歴史、公民、社会科と関連をさせたESD実践の構築と発信を目的とした。その結果、社会科（地理歴史科、公民科）で、それぞれに内容を関連させながら探究的な学習を行うことで、思考力の育成、資料を分析する能力、コミュニケーション能力が育成され、価値観を養う学習へとつながり、この価値観が持続可能な社会のための価値観となりえるものであることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The concept of “sustainable development” has been proposed as a solution to the challenges facing the global environment. While development and economic growth continue, global issues such as the deterioration of the environment, economic inequality, and urban problems need to be resolved.The porpose of this research is to debelop practices or curricula for geography, history,civics and social studies about ESD-Education for Sustainable Development- and publish the results. Many practices for ESD have constracted in geugraphy, history, civics and social studies. ESD is needed the personal values of every studen. The values would developed to educate the abilities of thinking, analysis of materials and comunicaton. Result of this reserch is publoshed as "ESD in Japan"(2017) by Kokon Shoin, Tokyo.

研究分野：社会科教育学

キーワード：ESD　社会科教育　地理教育j　歴史教育　公民教育　ESD実践の構築　国際化

１．研究開始当初の背景

地球の温暖化をはじめ、その原因となる環境問題は、国の枠を越えて協力して解決すべき問題である。このような状況のなかで、1980 年に IUCN(International Union for the Conservation of Nature and Natural Resources, 国際自然保護連合)などの 3 機関により、地球環境問題の解決に向けて、「持続可能な開発」の概念が提唱された。開発を抑えて環境の保全・保護を主張する国々と、開発が十分に進んでいないために工業化を一層進めたい国々との、いわば折衷案として提唱されたのが「持続可能な開発」である。この「持続可能な開発」は、環境教育のキーワードともなり、広く世界で通用する概念となっていく。日本の社会科教育が、現代社会の理解にとどまりがちの中、環境教育など未来を志向する教育観が、日本の教育に与えた影響は少なくなかった。他方で、さらなる未来志向の教育が提示される。それが、ESD(Education for Sustainable Development)である。ESD は、日本の提案により、2002 年の国連総会において決議され、ユネスコがその推進機関となり、さらには 2005 年から 2014 年の 10 年間が「ESD の10.年」となり、日本をはじめ各国で推進されていくことになる。この 10 年の終わりに近づいている今、日本をはじめ世界各国でどのように ESD の実践が行われたのか総括し、日本の ESD の実践を世界的な観点から捉えなおし、世界に発信することは意義があると考えられた。

２．研究の目的

ESD は、社会科では地理教育を中核としながら歴史教育、公民教育でも実践が試みられ、ESD を推進しつつある。そこで、本研究は、世界の ESD の実践を、地理教育を中核に総括し、日本の ESD の実践を世界的な観点から捉え直し、地理だけでなく歴史、公民教育と関連させた社会科における日本が世界に先導できるような ESD の実践を構築し、世界に発信することを研究目的とする。

３．研究の方法

ESD の実践は、環境教育および開発教育との関連が強いので、世界的には地理教育を中心として行われている。それは *Geographiedidaktische Forschungen*,Vol.42,2007 で世界的な ESD 研究が特集されていたことにもあらわれている。こうした世界的に研究がなされていることを踏まえ、ESD 実践という観点から文献を収集する。しかし、公表されている文献では、ESD の理論的研究が多く、実践が紹介されることは少ない。また、地理教育における GIS を世界各地の研究者が、それぞれの国の動向をまとめた Milson,A.J.,Ali.D. and Kerski,J.J 2012 *International Perspectives on teaching and learning with GIS in secondary school.* Springer によると、GIS を交えながら ESD を推進しようとしている国もみられる。そうした国がイギリス、ドイツ、ポルトガルといったヨーロッパ諸国、アメリカ、韓国、台湾といった国々である。こうした国々の ESD 実践を収集する。しかし、前述したように、こうした ESD 研究は理念的な研究が多く、実践的研究は多くなく、文献として示されていないことが多い。そこで、各国での現地での資料収集が必要不可欠となる。研究代表者および研究分担者には、こうした国の地理教育、社会科教育を専門としている者もおり、また、国際学会に毎年参加しているので、上記の国の地理教育、社会科教育の研究者とは交流が深く、ESD を実践している学校、教員を紹介してもらえる。そのようなルートから ESD 実践を進めている学校、教員に会い、資料を収集する。

さらに、海外からの研究者を招聘し、各国での取り組みについてシンポジウムを行い、それらの研究者と直接討論することで、日本の独自性をだす ESD 実践を構築する。また、地理、歴史、公民と相互関連した ESD 実践が望まれていることが明らかであり、また、そのような実践が日本の独自性が見いだせる ESD 実践である。しかし、この独自性は, 世界的な ESD 実践を総括することで、より一層明瞭に位置付けることができるので、基礎的な研究を踏まえての実践の構築をする。なお、本研究の枠組みは以下の図に示される。

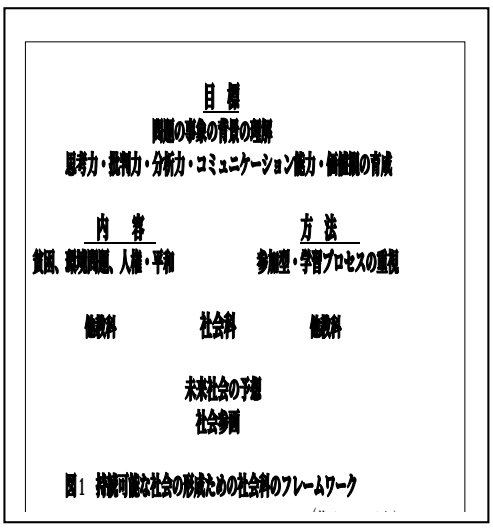

図1 持続可能な社会の形成とための社会科のフレームワーク

４．研究成果

研究成果は、以下のようにまとめられる。まず教科固有の特性と ESD の普遍性をつなげた授業開発をおこなったことである。地理などの特定科目にとらわれず、ESD の実践が可能になる。それは、ESD のキー概念を教科固有性をふまえたうえで適切に組み込むことで ESD としての教科教育が可能になるのである。具体的な授業案としては、持続可能な社会づくりを、「地理総合」の防災学習、「地理B」においての経済発展と生活の変化、身近な地域における社会的、環境的、経済的課題を高め、世界的な責任と政治的な参与に必要

な力をめざした学習の提案ができた。さらに、歴史的な観点からは、世界記憶遺産の教材化、過去を通して未来を構想する学習、ESD としての近代社会像の探究についての授業案などの提案ができた。さらに、公民的な観点からは、法教育においての ESD 実現の授業構成の提案、グルーバル・ガヴァナンス論からの ESD の課題、「多様性の尊重」「多様性の調整」の価値を普遍化する教育内容からの ESD 授業の提案、ESD の観点からの公民教育の改善を提案した。さらに ESD の態度目標から小学校の防災学習の改善を提言した。上記の社会科、地理、歴史、公民といった既存の教科、科目の観点からの ESD に基づいた授業開発であるが、ESD を基盤にすることで、社会科、地理、歴史、公民を連関させたものとなっており、ESD 実践を構築したものといえる。なお、これらの研究成果は、ポルトガル、イギリス、フィンランド、シンガポール、ドイツ、アメリカといった国々の ESD の動向をふまえている。また、これらの成果をえるために、下記のような授業実践を展開した。

2013 年度

授業テーマ
フィールドワークを通じた身近な地域の再発見
地域からとらえる貧困―フィリピンの事例を通して―
風刺画を活かした日本史授業
騎馬遊牧民と馬
日本の貧困―ワーキングプアを事例に―
カンボジア・スタディ―ツアーの事前授業―継続性に着目して―

2014 年度

「蘇鉄地獄」から考える沖縄の歴史
フィールドワークで発見しよう！―大子町での「自然を活かす」と「自然から守る」―
現代インドの対立を独立運動から考える―ガンディとヒンドゥーとムスリムと―
史料解釈から学ぶ世界史学習―イギリス産業革命期の児童労働を事例に―
相互依存関係から国際社会を考察する公民科授業の構想
カンボジアにおけるボランティアの学習を通して人とのつながりを考える―カンボジア・スタディ―ツアー事前学習として―

2015 年度

大子町における地域を再確認し主体的に意味付ける地域学習
ヨーロッパにおけるイスラーム
常陸国の人口減少から多様な視点を培う授業
「平和」の実現に向けて―「パックスロ＝ロマーナ」を手掛かりに―
「公正」な社会を考える授業―「子どもの貧困」を題材として―
望ましい途上国「支援」を考察する授業のあり方の研究―アンコールワット遺跡群の修復活動を事例として―

2016 年度

大子町生瀬地区における学校統廃合にかかわる景観変化
オリンピックから考える高校世界史の授業
アクティブ・ラーニングを導入した高校 ESD 実践ー食の教材化ー
高校公民科における農業学習―人物学習の視点から―

地球規模での課題は山積している。そのような課題を解決するための人材を育成する教育の意義は大きい。ESD という用語を用いなくても、世界各地で、ESD の精神と同様な教育がなされている。こうした中で、ESD は今後とも地球全体の将来を考える教育として重視されていくだろう。

学問分野をこえたグローバルな観点から地球の将来について考え,課題を解決しとていく考え方は、今後、その意味からも教育に対する期待は大きい。このように,我々が生活する地球を,将来にわたってどのように持続させ,そのためにはどのようなことをしなければならないのかという課題は引き継がれ,社会科,地理,歴史,公民教育についても,そのことは継承されなければならない。我々が住む地球、そこに暮らす人々、動物、植物を含む自然は、持続させていかなければならない。そこでの教育がどうあるべきで、どう実践されなければならいかは永遠のテーマとなるかもしれないが、本研究では、その異端が担えたと結論付けることができる。なお、研究成果は『教科教育における ESD の実践と課題―地理・歴史・公民・社会科―　ESD in Japan』として古今書院から著書として発刊した（2017 年 3 月）。この著書には代表者およびすべての分担者の成果が収められているだけでなく、この科研で開催した国際シンポの招待者にも執筆してもらっている。本研究は、「発信」も目的としているので、本書

は国内外へ発信する著作として、日本語の論稿には英文用要旨をつけ、英文の論稿には和文の要約をつけ、国内外に発信するという目的も達成している。本書の成果は以下のとおりである。井田仁康：「ESD の系譜」「ESD の展望」志村喬：「教科教育としての ESD 授業開発」吉水裕也：「高等学校「地理総合」における防災教育の一事例」永田忠道：「広島県における ESD 実践の展開と特質」金玹辰：「身近な地域の調査を通した地理教育における ESD の可能性」國分麻里：「ESD としての「世界記憶遺産」熊田貞介：「過去を通して未来を構想する社会科歴史学習の課題と可能性」佐藤公：「ドイツ歴史学習にみる ESD としての近代社会像の探究」磯山恭子：「法教育における公正に対するものの見方や考え方の育成」小野智一：「グローﾊﾞﾙ・ガバナンス論の現在」坪田益美：「社会科における持続可能な社会づくりに向けた社会認識の育成」唐木清志：「公民教育と ESD」竹内裕一：「ESD の態度目標と授業づくりの視点」池俊介：「ポルトガルにおける ESD の展開と地理教育」。なお、国際シンポジウムにパネラーとして招いた Clark Brooks 氏（イギリス、ロンドン大学）、Sirapa Tani 氏（フィンランド、ヘルシンキ大学）、Michael Solem(アメリカ、地理教育学会)、Geok chin Ivy Tan 氏（シンガポール、南洋工科大学）にも寄稿していただき、本研究成果が世界からの刺激を受けながら、世界に発信する成果ともなった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 19 件）
①吉水裕也（2017）「学びに向かう力」を意識した学習ナビゲート　レベルアップのポイント　獲得した概念を用いたパフォーマンス課題の設定と評価．教育科学社会科教育 No.694、pp.72-75.（査読なし）
②小野智一（2017）「ESD 実践の構築と発信に関する研究の動向―地理、歴史、公民を関連させた社会科教育の視点から―」『筑波教育学研究』第 15 号、pp30-45.（査読有）
③井田仁康（2016）高等学校「地理」の動向と今後の地理教育の展望．人文地理、68-1、pp.66-78.（査読有）
④井田仁康（2016）アクティブ・ラーニングと統計地図．統計、67-12、pp.33-38.（査読有）
⑤井田仁康（2016）社会科授業づくりの課題と取り組み―学習指導要領の改訂を見据えて―．社会科教育、No.690, pp.112-115.（査読なし）
⑥井田仁康（2016）ESD と地理教育の未来―総括　次期学習指導要領を見据えて―．新地理、64-3、pp.99-101.（査読有）
⑦竹内裕一（2016）『地理総合（仮称）』の内容構成と今後の課題–学習指導要領改訂に向けたこの間の動向から–．地理教育、45, pp.6-15.（査読有）
⑧金玹辰（2016）シンガポールの後期中等地理における地理的探究の強調－CGE O-Level 地理シラバスの分析を手がかりにして－，『北海道教育大学紀要（人文科学・社会科学編）』(北海道教育大学)，第 67 巻第 1 号，pp.85－100.（査読有）
⑨池俊介（2016）ポルトガルにおける ESD の展開と地理教育．早稲田大学大学院教育学研究科紀要，第 26 号, pp.1～14（査読有）
⑩田部俊充・永田忠道（2015）南アジア&アフリカ世界地誌学習の構築に向けて、新地理、63 -3, pp.62-65.（査読有）
⑪永田忠道（2015）市民性に関する国際比較研究の新たな可能性－日本と韓国から社会認識カリキュラム再構成の多国間検討へ－．社会科教育論叢、第 49 集，pp.11-22.（査読有）
⑫竹内裕一（2014）次世代を担う人材育成を射程に入れた地域問題学習–地域に生きる主体形成学習の可能性–、社会科教育研究，No.122，pp.62-73.（査読有）
⑬金玹辰（2014）香港の地理教育における自然災害の取り扱い－中学校カリキュラム及び教科書の分析を中心に－，新地理、62-1，pp.29－43.（査読有）
⑭磯山恭子（2014）法教育と ESD．芳賀正之，池田恵子，田宮縁編『2013 年度 ESD・ユネスコスクール研修会報告書』静岡大学教育学部、pp. 22-23.（査読有）
⑮大嶋正克・熊田禎介（2014）中学校社会科における歴史・公民融合単元の開発とその意義―特設単元『私にとっての現代』の実践を通して―．宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要、37 号，pp.65-72.（査読なし）
⑯ Ida,Yoshiyasu(2014) Disaster preparedness in geography education in Japan, .Journal of Geographical Research, No.61, November, pp.69-82.（査読有）(DOI:10.6234/JGR)
⑰竹内裕一（2014）身近な地域を軸にした社会科・地理教育カリキュラムの創造、千葉大学教育学部紀要、62，pp.1-12.（査読有）
⑱金玹辰（2013）韓国の中学校地理領域教科書における環境学習の一考察－単元「地域ごとに異なる環境問題」の分析を中心に－．北海道教育大学紀要（教育科学編），64-1 号，pp.267－279.（査読有）
⑲Ida,Yoshiyasu (2013) The continuity of geography learning contents in Japan. Journal of Geographical Research, No.59, November 、pp.49-62.（査読有）（DOI:10.6234/JGR）

〔学会発表〕（計 10 件）
①金玹辰（2016）シンガポールの後期中等地理教科書における地理的探究に基づく学習の特徴，日本地理教育学会第 66 回大会，慶應義塾大学日吉キャンパス．神奈川県横浜市

②KIM Hyunjin（2016）The Asahikawa Children's Environmental Map Contest and Environmental Mapping Activity, IGU-CGE Singapore Conference.シンガポール.
③井田仁康(2016)ESD と地理教育の未来(総括). 2016 年日本地理学会・東北地理学会秋季学術大会地理教育公開講座、東北大学. 宮城県仙台市.
④ Ida,Y.,Itoh.S. Akimoto,H.Ugawa,Y. Tsutsumi,J and Onishi,K. The role of augmented realty (AR) in new national curriculum in Japan. 33rd IGC, China National Convention Center Beijing.
⑤KIM Hyunjin（2015）Geography and the Integrated Curriculum in Japanese Elementary School, IGU Regional Conference 2015 Moscow Russia. ロシア、モスクワ.
⑥井田仁康（2015）ICT 時代の地理教育の意義. 2015 年人文地理学会大会地理教育研究部会第 35 回、大阪大学. 大阪府吹田市.
⑦ Ida,Y. Itoh.S. Akimoto,H.Ugawa,Y. Fukuchi,A. and Tsutsumi,J.(2015) Augmented reality(AR) information system for geography education. IGU Regional Conference 2015, Lomonosov Moscow State University. ロシア、モスクワ.
⑧井田仁康（2014）「地理基礎」（案）作成の背景－なぜ高校で「地理」が必要か－. 日本社会科教育学会第 64 回全国研究大会（課題研究）、静岡大学. 静岡県静岡市.
⑨井田仁康（2014）フューチャー・アースに向けた国際的な教育の課題. 日本学術会議公開シンポジウム「持続可能な未来のための教育と人材育成の推進に向けて」パネリスト、日本学術会議講堂. 東京都港区.
⑩Ida,Yoshiyasu (2014) What is demanded as geography education in Japan?
IGU Regional Conference. IGU Krakow Conference、Jagiellonian University.ポーランド、クラコウ.

〔図書〕（計 5件）
①井田仁康編（2017）『教科教育における ESD の実践と課題－地理・歴史・公民・社会科－ ESD in Japan』古今書院.
②唐木清志編（2016）『「公民的資質」とは何か』東洋館出版社.
③井田仁康・伊藤純郎・唐木清志・国原幸一朗・栗原久・國分麻里・須賀忠芳編著（2015）『中等社会科 21 世紀型の授業実践 中学校・高等学校の授業改善への提言』学事出版.
④Yoshiyasu Ida, Minori Yuda, Takashi Shimura, Shunsuke Ike, Koji Ohnishi and Hideki Oshima eds.（2015）Geography education in Japan. International Perspectives in Geography AIJ Library 3, Springer.
⑤永田忠道・池野範男編（2014）『地域からの社会科の探究』日本文教出版.

６．研究組織
(1)研究代表者
井田 仁康（IDA,Yoshiyasu）
筑波大学・人間系・教授
研究者番号：20203086

(2)研究分担者
竹内 裕一（TAKEUCHI, Hirokazu）
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号： 00216855

國分 麻里（KOKUBU, Mari）
筑波大学・人間系・准教授
研究者番号：10566003

金 玹辰（KIM, Hyunjin）
北海道教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：10591860

小野 智一（ONO, Tomokazu）
東京福祉大学・社会福祉学部・准教授
研究者番号：20433633

坪田 益美（TSUBOTA, Masumi）
東北学院大学・教養学部・准教授
研究者番号：20616495

永田 忠道（NAGATA, Tadamichi）
広島大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：90312199

池 俊介（IKE, Shunsuke）
早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授
研究者番号：30176078

唐木 清志（KARAKI, Kiyoshi）
筑波大学・人間系・准教授
研究者番号：40273156

吉水 裕也（YOSHIMIZU, Hiroya）
兵庫教育大学・学校教育研究科・教授
研究者番号：60367571

志村 喬（SHIMURA, Takashi）
上越教育大学・学校教育研究科・教授
研究者番号：70345544

佐藤 公（SATO, Ko）
明治学院大学・心理学部・准教授
研究者番号：90323229

熊田 禎介（KUMATA,Teisuke）
宇都宮大学・教育学部・准教授
研究者番号：90375519

磯山　恭子（ISOYAMA Kyouko）
静岡大学・教育学部・教授
研究者番号：90377705